



TITLE:

李璫の叛亂と其の政治的意義：蒙古朝治下に於ける漢地の封建制とその州縣制への展開

AUTHOR(S):

愛宕, 松男

CITATION:

愛宕, 松男. 李璫の叛亂と其の政治的意義：蒙古朝治下に於ける漢地の封建制とその州縣制への展開. 東洋史研究 1941, 6(4): 253-278

ISSUE DATE:

1941-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/145744>

RIGHT:

東洋史研究

第六卷
第四號

昭和十六年九月發行

李璿の叛亂と其の政治的意義

——蒙古朝廷下に於ける漢地の封建制とその州縣制への展開——

愛 宕 松 男

一、序——李璿の叛亂

二、金末河朔の情勢

三、漢人世侯の出現

四、蒙古朝廷下に於ける封建制

五、世祖の中央集權と州縣制度の確立

—

中統三年（宋理宗、
景定三年）

二月三日、山東に突發した李璿の叛亂は、蒙古人治下の北支那に深甚な衝動を與ふる事變

であつた。中統三年と云へば、其は正しく、元朝の基礎未だ定まらざる世祖が阿里不哥との抗爭に専念せる最中

であり、李璿と云へば之はまた、其の義父李全以來、五十年に亙る實力を東南山東・淮北一帯に蓄積せる強諸侯

の一人である。而も山東は古來富強の地である。前に金國の貞祐南遷に際しても、其は既に此の點を以て有力な

遷都候補地の一に數へられてゐた。(遼山集、趙非文墓銘)

顯征擅權。奄殿全齊。厲階泗漣。煮鹽涸海。剗銅夷山。地險物業。

王偉の「中統神武頌」はよく此の點に關して李璫勢力の機微を指摘してゐる。元史食貨志に徴しても明な如く、當時、山東の鹽は河間の鹽と共に北支那に於ける其の大宗であり、益都また腹裏管下唯一の產銅の地であつた。李璫をして能く其の富國強兵の實を擧げしめてゐたものが、此等鹽銅の利に在つたことは疑がない。而も彼の富力は獨りこれにのみ依るものではなかつた。宋史、李全傳が

膠西當登寧海之衝。百貨輻湊。〔李〕全使其兄福守之。爲窟宅計。時互市始通。北人尤重南貨。價增十倍。全誘商人至山陽。以舟浮其貨而中分之。自淮轉運達于膠西。福又具車輦之。而稅其半。然後從聽往諸郡貿易。

と傳へてゐる淮南地方との通商密貿易が、これ又李璫に於ても必ずや豊富な財源を提供してゐたであらう。吾々は之に關して張起巖撰ぶ所の張宏行狀に基いて作成せられた次の如き新元史、張宏傳を擧ぐることが出来る。

初宏億知璫必反。條其跡跡十事上聞曰。……又如市馬諸路。無論軍民概屬括買。獨不及益都。而璫方散遣其徒於別境。高其直以市馬。王文統與璫締交於此尤著。又中統鈔法各路通行。惟璫用漣州會子。所領中統鈔。

顧於臣境貿易。商人買鹽而鈔不見售。又山東鹽課之額。歲以中統鈔計爲三千五百錠。近年互爲欺誑。省爲二千五百錠。餘悉自盜。

李璫が漣州會子をのみ行使して其の境内に中統鈔の流通を沮止したと云ふ一節は、確に彼と南宋との間の通商關係を肯定せしむる資料と見做し得るであらう。かく考ふる時、南宋との貿易、特に馬匹の密輸出は、次に掲ぐる元史、唆都傳

李璣叛山東。從諸王哈必赤平之。還言于朝曰。郡縣惡少年從間道鬻馬于宋境。乞免其罪籍爲兵。從之。

とも参照しても確に李璣の利用する所であつたに相違ない。大安以來、半世紀に亙る喪亂の結果、荒廢殊に甚しい當時の北支那に在つて獨りこの殷富は、李璣にとつては云ひ得られぬ威力であつた筈である。「青齊の叛亂は因て來る所實に其の富力にあり」との見解が一部當時の人士の間に主張されてゐるのは(雪樓集、賈居貞祠堂記) 確に一面の眞實を盡すものと言ふ可きであらう。

此の李璣が漣海の地を宋に獻じて、突如世祖政權に反旗を翻したのである。尤も南宋側には、叛亂開始に前立つて豫め彼の内意は通達されてゐた。金華黃先生文集引く所の續資治通鑑長編には

景定三年(中統三年)二月丁亥朔。李松壽來納款。上諭宰執曰。情僞難憑。又曰。切須審處。〔賈〕似道奏。當與之

要約。如能歸漣海之地。方可取信。

とあつて、既に二月一日、漣海の地の引渡しを先決條件とする諒解が兩者の間に成立してゐたことが判明する。

理宗から賈似道に宛てた二月十日附の親書が之に關して、「來意眞確」と云ひ「不可失信」と告げてゐるのは

(金華黃先生文集、跋宋兩朝遺墨二首)、やがて現はるべき南宋の積極的な李璣支持を暗示するものである。果せるかな、浙漣の精兵

を率ゐて二月八日益都に入城した李璣には、程なく保信武寧郡節度使・督視京東北等路軍馬・齊郡王の官爵が授けられ、(錢塘遺事) 他面、夏貴に率ゐられた宋軍は毫・滕・徐・宿・邳の諸州を抜いて北上を開始した。かくして

二月二十六日、山東の要地濟南は益都より西進し來る李璣軍の爲に遂に占據さるゝ所となつたのである。

李璣叛すとの報に接した世祖は、特に其の重大性に鑑み、當時漠北に従軍中の宗王哈必赤を山東に差遣し、以て哈答(兀魯特氏)・博羅歡(忙兀特氏)・忽林赤(札剌兒氏)・拙赤哥(客列赤別子)・抹兀答兒(同乃台子)等の探馬赤

軍を統率せしむると共に、濟南・順天・眞定・東平・大名・歸德以下の漢軍諸萬戸の指揮に當らしめた。北支那に駐屯する此等蒙古・漢軍の主力が迅速に濟南に向つて總動員せられた結果は、さしもの叛亂も以後何等の新しい發展を示すに至らず、夏貴の軍勢渦口（安徽省懷遠縣東北）に敗れ、李瓊の本軍また老僧口又作老倉、老鶴口（濟南東北）に敗績してより後は、専ら濟南守禦の計を探らざるを得なくなつた。かくて範城すること五ヶ月、内外との連絡を完全に遮斷せられた李瓊は、七月二十日に至つて、大明湖に投水し、而も果さず、遂に生擒の身を大都に護送せらるゝに至つたのである。

若しも此の事件が單にこれだけで終結したものであつたならば、其は格別重要な意義を持たなかつたであらう。併し事實は決してさうではなかつた。元朝の内治・外交の各般の上には、其の重大な影響がやがて相次で現はれて來る。即ち、對外的には、先づ南宋に對する世祖の和平主義が之を機として訂正せられ初めるし、對内的には、俄然漢人への警戒が嚴重化されて來る。蒙古人侍衛出身の監戰萬戸が漢人萬戸の監視を目的として設置されたのを始とし（村上正二氏、元初に於ける）漢人一般に對する禁令、特に兵器に就ての其が顯著となり初めるのも、或は又、漢人王文統李瓊の舅に當り、此の事變の首謀者の一人として誅に伏した。の伏誅後、世祖朝の國家財政を左右する者が色目人の獨占する所となるのも、すべてはこゝに起源を持つ事象と云はねばならない。併し乍ら、李瓊の叛亂の齎した影響としては何と云つても、漢人世侯の廢止が重大である。所謂漢人世侯の廢止と云ふのは

由後強諸侯恃齊險。及大帝罷諸侯之有土者。云々

とある珊竹公神道碑より以下、當時の文献が一樣に明言する如く、國初以來の漢地に強固な根を下してゐた封建的勢力が此の事變を契機として完全に一掃せられた事實を指す。蓋し蒙古朝廷下の漢地に在つては、郡縣に割據

して其の軍民を統轄する漢人軍閥は獨り益都の李氏あるのみには限らなかつた。河東・河北・山東の各地、換言すれば、南流する當時の黄河以北の北支那には、其は通じて見受けられる存在であつた。山東には李氏と並んで強諸侯を謳はれた濟南の張氏・東平の嚴氏が鼎立してゐたし、河北は順天の張氏・眞定の史氏・大名の王氏によつて略々三分さるゝの形勢を呈してゐた。西京の劉氏以下群小諸侯の跨有する河東また然りである。所謂漢人世侯の廢止なるものが、此等大小數ある諸侯から其の特權を奪ひ去り、一朝にして彼等を一介の官僚と墮せしめたものとすれば、其は確に重大な政治的意義を有する事件と稱せざるを得ないであらう。本論文に於ては、此の叛亂の持つかゝる政治的意義を専ら其の歴史的經過に於て看んとするものである。

二

成吉思汗五年(金衛紹王大安二年)を以て開始せられた蒙古軍の金國侵入は、當初主として西京路の北邊、即ち外長城線外の地域に向つて加へられたものなるにも拘らず、其は彼等にとつては得る所多き遠征であつた。吾々は、元史本紀、太祖六年冬十月の條に云ふ「襲金群牧監、驅其馬而還」に依つて、然か言ふことが出来る。事實、金國に於ける群牧所の損傷は壊滅的であつた。「會邊將失守。芻糧馬牛焚剽殆盡」とは當時撫州(哈喇巴爾哈孫)刺史たりし石抹元毅に就て金史の記す所である。金國に對する部族的復讐の念が其の動機の主要なる部分を構成してゐた當時に於てすら、戰爭は實に蒙古人にとつては、資財獲得の手段であつたのである。此の點、蒙古軍の侵略が更に長城線を南に越して中原に迄波及し初めて來ると、金國の蒙る被害は漸く甚大とならざるを得ない。而も大安三年、金國は會河堡に於て大敗を喫した。其の結果

自用兵以來。彼聚而行。我散而守。以聚攻散。其敗必然。不若入保大城併力備禦。

と當時完顏襄が正しくも洞察した如く、金朝は早くも國境線の全般に互つて堅固な防禦陣を布くべき自信を失つてゐた。侵入軍に對抗すべく殘された方法として、彼等は唯主要な州縣に其の勢力を集中すると云ふ重點主義しか持つことは出来なかつた。そして事實、河朝の金軍の間には程なく此の態度が普遍化して行つたのである。仔細は、貞祐四年頃の事情を述べた金史、完顏從坦傳「當是時。諸路兵皆入城自守。百姓失所」が明確に之を示してゐるのである。

金朝の採つたかゝる態度は、云ふ迄もなく、無防備のまゝ遺棄せられた數多くの鄉村・縣邑の犠牲の上に於てのみ可能である。蒙古軍の殺戮と掠奪とに暴露せられた此等の土地・住民には、此の結果荒廢と離散とが今や不可避となつて来る。流民の發生は盜賊を生み、盜賊の生發は治安の紊亂を齎さずにはおかぬ。河朝の住民の間に自衛集團の結束・強化が行はれて来るのは、かゝる状態の下に在つては必然と云はねばなるまい。吾々は之に關して多くの事例を當時の記録の中から擴ふことが出来る。一例を舉ぐれば金史、賈邦猷傳及び元史、王義傳であるが、そこには河東・河北に於ける當時の此の次第が遺憾なく描き出されてゐるのである。

賈邦猷。霍州霍邑縣陳村人也。舉進士第。質直有勇略。〔貞祐・興定間〕大元攻河東。邦猷集居民爲守禦計。

王義。眞定寧晉人。家世業農。義有膽智。沈默寡言。讀書知大義。金人遷汴。河朝盜起。縣人聚而謀曰。時事如此。吾儕欲保全家室。宜有所統屬。乃相與推義爲長。

乃ち、前者に在つては蒙古軍の侵寇に對し、後者に在つては群盜の跳梁に對して、何れも一個の民衆が、或は自ら提唱し、或は衆に推舉せられて、其の郷里の自衛に當つたことが知られよう。而も一郷・一村を以て成立した此等の集團はやがて隣郷との間に緊密な連合を遂げることに依つて其の單弱を免れねばならない。元史趙柔傳は

其の恰好な一例を提供してゐる。

趙柔。涑水人。有膽略。善騎射。好施與。金末避兵西山。柵險以保鄉井。時劉伯元・蔡友資・李純等亦各聚衆數千。聞柔信義。共推爲長。

數村を連ね數郷を合した強力な集團は、かくして成立したであらう。

さりながら、何時果てるともなき社會の不安は、彼等をして何時迄もかゝる状態にのみ停滯せしむることを許さない。増大する不安に即應せんが爲には、此等郷曲自衛集團は、夫々所屬の縣城に連絡することの不可缺を悟つて来る。蓋し縣城こそは地方行政の最低段階として、官僚組織が自治制度に直接する具體的場所だからである。純民間的な郷曲自衛集團は、かくすることによつて初めて官憲に接觸し、其の權力組織の一端に自己を置くことが出来るであらう。朝廷の直接防禦圏外に拋棄せられた彼等としては、其は擇ぶべき唯一の生存方法でしかなくつた筈である。冠氏縣下の豪民趙林は、かくして郷民を率ゐて遂に縣を守り（元史、趙天錫傳）

趙天錫。冠氏人。屬金季兵起。其祖以財雄鄉里。爲衆所歸。貞祐之亂。父林保冠氏有功。授冠氏承。

藁城縣下の農民王善は、初め里人を集めて郷里を衛つたが、やがて縣官となつて縣下の自衛集團を率ゐるに至

つた。（李治撰、王善神道碑）

乙亥歲（貞祐三年）荏饑。人相食。盜蜂起。公諡里人曰。今茲喪亂。我輩不有以協同保聚則爲人所魚肉去矣。衆歛

服。推公爲冠。公課人種禾三頃。西成將莖艾。群寇環奪。禦備有方。竟微遺棄之失。累功主本縣簿。

其の當初、郷曲を中心として發生した民間自衛集團は、かくして半官的な性格を帯びるに至るのであるが、其は同時に、彼等の縣單位迄の擴大を意味しなければならない。此の場合、北支那の當時の縣が、政治的にも經濟的

にも平素一個の單位體を形成してゐたと云ふ事情の外に、一縣當り平均九里平方といふ其の狭小な面積が、或は又各縣毎に多かれ少かれ固有されてゐる地理的・歴史的纏りが、一層此の傾向を助長せしめたであらうことは想像に難くない。殊に縣城は、當該地方に於て防備施設を有する唯一の地點である。事ある毎に、其所が縣下の住民の避難地となり防禦の據點となることは何時の時代に於ても變らない。金末喪亂の河朔には、かくして縣城を中心とする縣單位の自衛集團が彼方此方に結成されて來る。而も、官憲との連絡を求めて積極的に盛り上つて來る此等民間の要望は、他面金國にとつては利用すべき絶好の機會であつた。

〔貞祐初〕完顏弼奏。……村寨城邑兵退之後。有心力勇敢可使者。乞招用之。

とか或は又

〔貞祐三年二月〕張行信上書言四事。……自兵亂之後。郡縣官豪多能糾集義徒。摧擊土寇。朝廷雖授以本處職任。未幾遣人代之。夫舊者人所素服。新來未必皆才。緩急之間啓釁敗事。自今郡縣缺員。乞令尙書省選人擬注。其舊官民便安者宜就加任使。朝廷多其議。

と云ふ建議が、當時しきりに朝廷に行はれ而も其等が多く採用せられたことは此等金史本傳の記載を俟つまでもなく當然な事柄と云はねばならない。民間の自衛集團は、是に至つて、義軍と稱せらるゝ臨時の官軍となつたのである。

併し乍ら、河朔州縣に於ける民衆のかゝる動向にも拘らず、金朝はやがて全面的に彼等の期待を裏切らねばならなくなつた。他でもない。貞祐二年五月に於ける宣宗の南遷及び之に引續く河南中心政策の採用が即ち其である。

元來、宣宗の南遷は其の當初に在つては決して河朔の抛棄を意圖するものではなかつた。貞祐二年、宣宗が丞相完顏福興（承暉）の主張に従つて、屈伏的講和の態度を蒙古軍に向つて執つたのも、實を言へば

甲戌（貞祐二年）金丞相高琪與其主謀曰。聞彼人馬疫病。乘此決戰可乎。丞相完顏福興曰。不可。我軍身在都城。家屬居諸路。其心向背未可知。戰敗必散。苟勝亦思妻子而去。祖宗社稷安危在此舉矣。今莫若遣使議和。待彼還軍更爲之計。如何。金主從之。

と聖武親征録が傳へる如く、當時京師に集結中の軍隊に分散の氣運が濃厚なのを察して、徐ろに之が善後策を講すべき餘裕を得んが爲の方法に過ぎなかつた。そして汴梁遷都こそは實に、其が具體的着手の第一歩に他ならなかつたのである。そして又河朔在住の軍戸の家屬百萬餘口が、遷都に續いて強制的河南遷徙を命ぜられたのも、其の顯著な事例と言ひ得るのである。金朝は、かくして彼等を河南の安全地帯に保護する一面、之を質と爲して以て、自國軍隊の統御に資せんとしたのである。従つて金朝は、河朔に對して依然之を防衛すべき軍隊を駐屯せしめてゐたし、州縣には之を守る地方官をなほ配置し續けてゐた。貞祐三年二月、蒙古軍による再度の包圍の爲に、中都危しとの報に接するや、「中都重地。廟社在焉。朕豈一日忘也」（金史本紀）と云つて、急遽重兵を出して救援に赴かしめた宣宗でもある。貞祐の南遷が、河朔の抛棄を意味するものでなかつたことは明でなければならぬ。

其にも拘らず、宣宗の南遷は河朔官民の間に甚大な動搖を與へずにはおかなかつた。

貞祐三年五月。朝議徙河北軍戸家屬於河南。留其軍守衛郡縣。高汝礪言。……且所過百姓見軍戸盡遷。必將驚疑謂。國家分別彼此。其心安得不搖。況軍人已去其家而令護衛他人。以情度之。其不肯盡心必矣。民至愚

而神者也。雖告以衛護之意。亦將不信。徒令交亂俱不得安。其利害所繫至重。乞先令諸道元帥府・宣撫司・總管府熟論可否。如無可疑。然後施行。不報。

而も其は、時の宰相高汝礪の既に正しくも豫想した事態に過ぎなかつたのである。朝廷によつて委棄されたと確信した河朔の官民は、不安の餘り續々政府を追つて河南逃避を企て初めたし、他方、河朔にはも早や守るべき自己の家屬も産業もなくなつた軍士等の間には、寧ろ代つて河南防衛に對する熟意が生じて來た。

河北諸路以都城既失・軍戸盡遷。將謂國家舉而棄之。州縣官往々逃奔河南。乞令所在根括。立期遣還。違者勿復錄用。未嘗離任者議加恩賚。

貞祐三年、監察御史許古は既にかくの如き對策を奏上してゐる。而も其は獨り許古にのみ限られたものではなかつた。勸農事李華に在ても（金史本紀）、進士劉炳に於ても（金史本傳）、全く同一の事實と建策とが開陳せられてゐるのである。かゝる情勢に對して、金朝は無論無關心ではあり得ない。河朔の官吏に對しては特に任官の資格を低下し、昇級期間を早め、降職の規定を撤廢して極力之に對應した。併し結局、其等の努力はすべて無駄に終つた。「河北職任。雖除授不次。而人皆不願」の有様か乃至は「河北之官。朝廷減資遷秩。躡等以答其勞。聞河南官吏以貶逐目之」（金史、完顏從坦傳）の狀態は之を如何ともすることが出来なかつたからである。金國首腦者の間にやがて無氣力と偷安の氣分が支配的となつて來るのは、此の點やむを得ざる所でもあつた。

平章高琪止欲以重兵屯駐南京以自固。州郡殘破不復恤也。

金史が宣宗朝の宰相朮虎高琪に就て、其の貞祐末年の態度を述べてゐる中には、も早や河北の回復に對する南遷當初の意氣は其の片鱗さへも見出すことは出来ない。

既に宣宗の南遷に際して河朝の民衆の中に懷かれ初めた危惧の念は、引續く軍戸の移住・中都の陷落・官吏の逃亡によつて益々増長せられて行つた。軍戸の例に倣つて河南への移住を企てる者が、彼等の間にも次第に其の數を増して來たことは、既に述べた所である。併し此の場合特に注意しなければならないことは、其等の行動が一般的には決して無條件に執らるべきものではないと云ふ事實である。吾々は間接ながら軍戸の例を通じて之を窺ひ得るであらう。高汝礪は貞祐三年五月、軍戸の強制的河南移住に反對した。併し彼が其の理由とした所は一體何であつたらうか。

此事果行。但便於強豪家耳。貧戶豈能徙。且安土重遷人之情也。

富強の家にとつてこそ、其は容易に且自發的に行はれ得るとしても、蓄積なき一般農民には、其の田地を棄てて遠隔の地に遷徙することは甚しい難事でなければならぬ。此の點、金朝の河南中心政策は、河朝に残留する民衆から彼等の依頼する唯一の希望を奪ひ去るの結果となつたのである。朝廷と彼等との間を結ぶ統轄關係の杜絶した河北の州縣は、従つて其の結果、隣境との有機的な連繫をも喪失するであらう。「河朝郡縣皆以拘文不相應援。由此殘破」(金史、完顏綱傳)と云ふ状態は時と共に深刻とならざるを得ない。此の時に當り當時の文獻(牧庵集、榮祐神道碑)が

宣宗感國播汴。河朝豪傑所在爭起。倡亂義兵。完保其境。金詠以官。冀賴其力復所失地。

と云へる如く、金朝にしてなほ河北維持に對する一脈の希望ありとしても、其は單なる希望でしかなかつた。興定三年、完顏伯嘉の爲した次の上章にも明な如く

自兵興以來。河北桀黠往々聚衆自保。未有定屬。乞賜招撫。署以職名。無以他人所先。

朝廷の組織的・實力的な指導と支持とを缺如せる状態の下に於ては、かゝる義軍と雖も、已に中央の統制に従順ならざる「桀黠」の輩に過ぎなかつたのである。金末河朔の州縣は、かくして次第に金朝より分離し獨立して行く。

三

蒙古軍の中原侵入につれて、金末河朔に起つた郷兵・義軍なるものは、元來其の郷曲自衛を目的として結束せられた集團でこそあれ、決して金國に對する忠誠の念に驅られて蹶起したものではない。彼等が金國の官爵を帯び其の官軍となつたのも、實は其によつて朝廷の實力的な援護を獲得せんが爲の手段に過ぎなかつた。其の彼等が、此の期待を完全に裏切られて州縣に孤立せざるを得なくなると、そこには自ら、彼等本來の個體的半面が強く現れて來なければならぬ。而も此の場合、彼等とも早や當初の如き純然たる自治的自衛集團に還元され得べきものでは決してない。官軍として、少くとも彼等は、權力による組織的上下關係に編成せられた經歷を経てゐる。州縣毎に出現せんとする獨立勢力が、今や軍隊的な、少くとも官僚的な色彩を多分に帯びたものなることは言ふ迄もなからう。特に此の傾向は、河南の朝廷との連絡が杜絶すればする程、彼等の間に濃厚となつて來る筈である。吾々は此の消息を、蒙古軍に投降し來れる河北の民衆が其の初期と後期との間に示す顯著な相違の上に看ることが出来るであらう。乃ち、初期の投降者として、代表的な永清縣の豪族史秉直は、太祖八年僅に招誘する所の郷民萬口を以て來降したに對して、同じく十五年蒙古軍に投降した嚴實には、實に彰德・大名・磁・洺・恩・博・滑・濬の二府六州の民戸三十萬が其の領民として率ゐられてゐたのである。金朝末期の北支那は、かくして遂に大小軍閥の全面的に割據する状態に陥つて了つた。

併し乍ら、かゝる形勢は外敵の侵入に對して其の抗戰力を極度に低下せしむるものには相違ない。蒙古軍は容易に孤立せる彼等を各個撃破し得るであらうからである。殊に、太祖十二年（金宣宗、興定元年）中原經略を一任せられた國王木華黎が燕雲に行省を設置してより以來、漢土に對する蒙古軍の政治的支配欲は躍進する。連續的・計畫的な作戰が彼等によつて實施せられると共に、他面投降者に對する安聚が留意せられて來た。（牧庵集、王興秀神道碑）

王興秀。農蠡之博野宋村。「興定元年」公聞兵將至曰。丈夫生三十年而勞苦耒耜。屈壓極矣。今已委身餌敵。

暴骨草野。且吾君已棄民。民尙誰死哉。吾有自圖富貴耳。乃以是撼三十餘村之民。汝幸從我。我能活汝。乃將壯士數百輩。出蠡疆迎兩大帥萬戶劉伯林・御史大夫蕭公降。帥善其來。與之幟曰。張汝之鄉。我兵自斂戰不侵汝也。大兵及城。城方力完守具。礮死蕭大夫。兩軍憤厲。一鼓屠其城無噍類遺。而三十村無毫毛傷者。

侵入軍に對して徒勞な抵抗を試みることは畢竟屠殺を招くに等しいと知つた時、そして又蒙古軍に早く走つた者等が其の庇護の下に、強力に保全されてゐる例を見せつけられた時、金國の北邊には停止することを知らぬ新しい動搖が生じた。蒙古軍に投降することが自己防衛の最も確實な方法であると悟つた河朔の民衆は、夫々の首領に率ゐられて金國を離反して行つた。崇慶元年（太祖七年）威寧を以て蒙古軍に投降した劉伯林が、其まゝ西京留守兼兵馬都元帥として、安堵せられたのを最初として、以下年と共に投降者の數は増加する一方であつた。（次表參照）其はとりも直さず、名實ともに金朝の威令が河朔より撤退する貌であり、同時に蒙古大汗國の漠地經營の進展する相でもあつたのである。

今、其の主要な投降者を表示すれば次の如くである。

(I) 河北地區

投降年時	投降者 / 出身	投降後 / 官職
太祖八年 (貞祐元年)	永清縣豪族・鄉兵長 史秉直 子 史天倪	朔州管民官 永清縣萬戶
	涿水縣民・鄉兵長 趙柔	涿易二州長官
	趙州萬戶 王玉	元帥府監軍・趙州四十寨之長
	朔州平曲水寨管民官 石抹孛迭兒	千戶
九年	蔚縣劉鄉里農民・鄉兵長 賈德	提控景州兵馬事
	寧晉縣農民・鄉兵長 王義	寧晉縣令兼趙州以南招撫使
	東鹿縣民・鄉兵長 耿福	安定軍節度使行元帥府事
	行唐縣民・曲陽縣鄉兵長 耶順	行唐縣令
十年	藁城縣民・義軍將 董俊	中山府監軍左副元帥・行知州事
	藁城縣民・義軍萬戶 趙迪	永安軍節度使
十一年	興平軍節度府幕官 王誥	興平路兵馬都總管知興平府事
(興定元年) 十二年	博野縣宋村民・鄉兵長 王興秀	千戶招撫使
投降年時	投降者 / 出身	投降後 / 官職
太祖七年 (崇慶元年)	威寧防城千戶 劉伯林	西京留守兵馬副元帥
	威寧守將 夾谷常格	萬戶兼招討使
十一年	西河縣民・平遙義軍百戶 杜豐	兵馬都提控
(貞祐四年)	堅州豪俠・鄉兵長 王兆	堅州左監軍
十二年	同 劉會	堅州軍事判官
(興定元年)	定襄縣民・鄉兵長 周猷臣	定襄令
十三年	平遙縣民・鄉兵長 梁瑛	元帥左監軍
	祁州民・鄉兵長 程達	監軍鎮撫軍民都彈壓
	河津縣民・鄉兵長 史千	鎮西帥
	解州長官 儀肅	解州節度使
	臨泉縣令 袁湘	臨州帥
	蒲縣民・鄉兵長 謝天吉	鎮邊大元帥蒲縣令
	晉城縣民・鄉兵長 段直	澤州長官兼潞州元帥府右監軍
十四年	曲陽縣民・鄉兵長 靳和	絳陽軍節度使

(II) 山西地區

十三年	定興縣農民・義軍將	張 柔	便宜行事行元帥事
	定興縣沈陶井里農民・鄉兵長	薛福堅	百夫長
	易州行軍千戶	何伯祥	易州軍民總管
十四年	藁城縣民・義軍將	王 善	同知中山府事
	寧晉縣唐城鄉民・鄉兵長	李 直	行寧晉縣事
	弟	李 讓	管軍總校
十五年	南宮縣民・鄉兵長	王 珍	大名縣軍前都彈壓
	磁州刺史	李 平	磁州安撫使注源軍節度使行元帥府事
	永年縣民・鄉兵長	杜 泉	行軍提控曲周縣令
	懷來縣蒙民・鄉兵長	譚資榮	交城縣令元帥左都監
太祖朝	清池縣民・鄉兵長	榮 祐	行都統萬戶府事
	安陽縣民・鄉兵長	趙 某	聊城縣總管
	磁州軍官	杜國用	磁州守
	節陶縣民・義軍萬夫長	朱 泉	彰德錄事

十六年	鄉寧縣吏	趙 仲	鄉寧縣令
十七年 (元光元年)	榮河縣民・鄉兵長	吳 信	鎮西元帥
	壽陽縣軍官	薛 珪	招撫副大使兵馬都元帥

(三) 山 東 地 區	涑州刺史	奧屯世英	萬戶德興府尹
	濟河縣民・義軍將	劉 通	濟河縣總管左副都元帥
	長清縣黃山里民・鄉兵長	朱 楫	兵馬都總領同知濟南府事
(興定四年)	冠氏縣令	趙天錫	元帥左都監冠氏縣令
	長清縣民・彰德大名磁州恩博滑濟州義軍主將	嚴 實	行尙書省事
	歷城縣民・歷城章丘鄒平濟陽長山辛市蒲台張新城涑州義軍主將	榮 榮	知濟南府事山東行尙書省兼兵馬都元帥
二十一年 (正大三年)	宋廣州觀察使	李 全	山東淮南楚州行省
二十二年	京東總管		

投降者に對して其の土地・人民を安堵すると云ふことは、換言すれば、蒙古軍が其の占領地域の擴大を企圖してゐたことである。而も此の場合、投降する者が河朔に割據する軍閥の首領であり、之を納れる者が封建體制を具へた蒙古人であるとすれば、其の結果そこに實現されるものは云はずして明かである。

金既播汗。太祖徇地。北人能以州縣下者即以爲守令。僚屬聽自置。罪得專殺。(牧庵集、遼陽高氏墳道碑)

其は管民官として自由に管下の官屬を任命し得る者であつた。又其は

國家當肇造際。所在豪傑應期効順。昇世侯疊將。鎮據一方。父死子繼。兄沒弟及。(秋澗集、王遵神道碑)

世襲的軍官として一方に割據するを許されてゐた。

吾朝以神武起北方。幽燕以南風從雲會。功成事定。剖符錫命。列爲侯伯。連城數千。戶數十萬。租賦焉生殺

焉。一出於侯伯。(紫山集、慶博州趙總管致仕還鄉八秩詩序)

要するに其は、土地・人民を領有し、生殺與奪の權を握る封建諸侯であつたのである。

四

蒙古朝治下の漢地に成立した此等所謂漢人世侯なるものは、言ふ迄もなく、其の領域安堵の代償として貢賦の提出を義務づけられてゐた。吾々は之が詳細に就ては知り得ないとしても、而も其の大概だけは之を窺知するに困難ではない。宋史、李全傳が傳ふる所に依れば、太祖二十二年(宋理宗、寶慶三年)四月、匪賊集團ではあるが併し、山東・淮北地區一帯に隱然たる勢力を有する李全が蒙古軍に投降し來つた時、彼は「歲毎に金幣を獻ずる」と云ふ條件の下に其の舊勢力を保全せられた。李全の戰歿後、其妻楊氏が代つて軍務を總領する時代になつても、此の歳貢は依然正しく續けられてゐた。

〔李全〕既平定山東。志吞淮海。因攻揚州。殁於城下。公〔董進〕率麾下推其夫人楊氏。權主軍務。皆悅服。越明年楊氏入覲。得紹夫職。假公以軍帥之名。使代征戍之勞。又乘傳赴闕。奏事進貢諸物。

李全の部將董進の神道碑は其に就てかく言つてゐる。然らば其の歳貢は如何なる内容を持つものであらうか、宋史は、大略ながら之に關して説明する所がある。

李全山東經理未定而歳貢于大元者不缺。故外恭順于宋。以就錢糧。往々貿易輸大元。

李全は乃ち、宋國からの機密費を以て、而も之を南貨に貿易して此の歳貢品に充てゝゐたのである。此の點、蒙古朝廷に對する漢人世侯の貢賦なるものは、彼等にとつては、決して過大な負擔であつたとは考へられない。吾々は今一つ高麗の場合を擧げることによつて——高麗の蒙古大汗國に對する關係は、漢人世侯の其に比べて、大小規模の差別こそあれ本質的には何ら相違はなかつた——此の推測を確めてみたい。高麗史は、太祖十六年（宗麗高八年）蒙古大汗國の監國帖木哥幹赤斤——當時成吉思汗は西域に遠征中である——の要求した歳貢として、獐皮一萬領、細紬三千匹、細苧二千匹、綿子一萬斛、龍團墨一千丁、筆二百管、紙十萬張、紫草五斛、荳花・藍筍・朱紅各五十斛、雌黃・光漆・桐油各十斛を算へてゐる。其の主要な品目が、純農業生産物よりは寧ろ工業生産品とも云ふべき物から成立つてゐること、及び其の要求額其ものが高麗の國力にとつて決して消化しきれぬ數量でなかつた點を見るべきである。漢人世侯にはなほ明かに、十分なる經濟的餘力が殘されてゐた。さればこそ、太宗初年の狀勢を論じて次の如き耶律楚材の言が出されてゐるのである。乃ち元史本傳に

太祖之世。歲有事西域。未暇經理中原。官吏多聚斂。自私貨至鉅萬而官無儲待。

漢人世侯の許に集積せられた此等の餘力は、必然彼等を富強たらしめずにはおかぬ。尤もそこには

金貞祐河朔干戈弗靖者皆二十年。生齒耗亡十七。

と云はれる（牧庵集、呂涑神道碑）

如き河朔の荒廢が嚴存してゐて、彼等の富強化に重大な障害を與へてゐたことは認めなければならぬ。戰亂と之に續く凶年・疾疫の結果、當時に於ける漢地の人口減少は甚しいものがあつた。金史

食貨志が金國版籍の極盛として掲げる泰和七年十二月（蒙古、太祖二年）の七百六十八萬四千四百三十八戸に比べて、僅

か二十九年の後、蒙古太宗七年の作成に係る所謂乙未年籍が、殆ど同一地區内に於て、總計百十餘萬戸を算するに過ぎなかつた事實が何よりもよく此の間の消息を物語つてゐる。其はまた金末元初の士人が、荒蕪たる田野・蕭條たる市井を記録すること多き所以でもある。漢人世侯の各々が境内の此の荒廢に對して多かれ少なかれ其の復興に努力したことは言ふ迄もない。彼等に殘された經濟的餘力は、かくして、保障休息への方向に費されることとが少くながつたのである。治安を維持し民力を涵養する所には、自ら流離の民が參集し、其の結果土地は開け物資は豐となるであらう。かくして淇州は周氏によつて「恒産・完美の室」を致し、西京は夾谷氏によつて「山北に於ける樂土」と化した。磁州滏陽縣は高氏而努力によつて其の荒廢より回復し、鳳翔は王氏によつて城郭完美・田野開闢の域に達したのである。東平の嚴氏・濟南の張氏・眞定の史氏・藁城の董氏以下に於ても、文献は何れも同様の効果を賞へてゐる。此の限り、漢人世侯は郷土政權として、小規模ではあるが併し本來的な性格を維持して行くであらう。

併し乍ら、漢人世侯の義務なるものは、かゝる餘力を享受し得るが如き歳貢のみを以てしては決して完全には果されてゐなかつたのである。割當兵力を率ゐて自ら蒙古軍の侵略戰に協力すること、之が彼等に與へられた今一つの大きな義務であつた。勿論、紫山集が張柔の佐領王沂に就て述べてもゐる様に

是時四方猶未平。例以長官主征伐。民政悉聽於倅貳。

世侯の出陣した後には、彼等の腹心が境内の政治を代行することが認可せられてはゐた。併し其にしても。之が世侯本來の趣旨に嚴密には副ひ得ないものなることは明である。蒙古軍に對する軍事的協力の義務は、漢人世侯から、其の郷土政權としての性格を次第に稀薄化せしめて行くであらう。併し其の半面、彼等は之によつて、其の勢力圏を急速に擴大せしむる可能性を持つ結果ともなつたのである。其は、單に彼等が其の參加した戰役によつて新たなる土地・人民を獲得したと云ふだけの意味ではなくして、在來の大小諸世侯の間に全般的な統合が行はれた結果でもある。戰場に必要な指揮の統一を得る爲に、蒙古人は漢軍に編成を與へたのである。有力なる世侯は萬戸に任ぜられて、其の下に、千戸職を授けられた小世侯を指麾した。代表的な若干の世侯が巨大な一大軍閥に迄發展する契機は實にこゝに在つたのである。河東では、其の北部に西京萬戸劉黑馬が、其の南部に太原萬戸梁瑛が擡頭した。河北には、眞定萬戸史天澤を筆頭に、順天萬戸張柔・中山萬戸邸順・大名萬戸王珍が大をなし、山東には、東平萬戸嚴實・濟南萬戸張榮・益都行省李全が夫々雄飛した。就中、眞定の史氏・順天の張氏・東平の嚴氏・濟南の張氏に至つては、當時「河北之四大諸侯」の目ありしに相應しく、其の麾下に統率する數多き千戸、例へば史氏に於ける王玉・張興祖・張全・李伯祐・張思忠、張氏(柔)に於ける何伯祥・王義・李讓・聶福堅、嚴氏に於ける李玉・朱泉・張晋亨・朱楫・趙天錫、張氏(榮)に於ける劉斌・劉鼎の如き、其の大多數の前身は各々獨立せる錚々たる世侯であつたのである。金末、河朔に群立した小規模な地方政權は、かくして蒙古朝廷下に於て、巨大な地方軍閥へ方向に向つて急速な展開を遂げて行つた。

勿論此の間に在つても、蒙古朝廷の統制力は次第に彼等の上に深まつて來る。殊に、太宗朝に於て企てられた

自主的統治への計畫は、彼等に其の版籍返還を強制する乙未年籍の作成ともなつて、事實重大なる危機を彼等に將來した。併し此の場合、漢人世侯にとつて豫想外の幸ともなつたことは、此の新政策が其自身重大な破綻を内包してゐたことである。高度な州縣制の樹立を目標とする耶律楚材と、蒙古族による封建的共同支配を意圖する太宗との間に、根本的な立場の相違が暴露した時、其は完全に不徹底な制度に變形させられて了つた。其の結果、一介の官僚に顛落することも或は又無力な陪臣に墮することも、共に之を免れた世侯等は依然部曲を率ゐる世襲的軍民兼領官として其の封建領主的存在を續けることが出来たのである。此の限り、蒙古朝の支那統治は、略一貫した漢人世侯による間接支配に終始したと結論し得るであらう。

五

世祖の自立は、從來蒙古大汗國の一部分を構成してゐた漢地が、彼に率ゐられて其の分離獨立を實現したことである。此の點、前諸朝を通じて認められた漢地に對する殖民地的態度は、こゝに完全に清算されねばならぬであらう。蒙古人主權者の上に現はれる此の根本的態度の變化が、直接其の政治形態の上に反映すべきことは言ふまでもない。そして此の場合、先づ問題となるべきものは、前代間接支配の遺制たる漢人世侯の存在である。

中統元年三月二十四日、居城開平府に即位を宣言した世祖が、其の第一着手として漢地に施行した組織的施設なるものは實に他ならぬ次の如き十路宣撫司の設置であつた。

燕京路(宣撫使李德輝・賽典赤、副使徐世隆)、

北京路(宣撫使楊果、副使趙昞)

眞定路(宣撫使布魯海牙・劉肅)

大名彰德路(宣撫使張文謙、副使游顯)

西京路(宣撫使粘合南合、副使崔巨濟、

東平路(宣撫使姚樞、副使張肅)

河南路(宣撫使史天澤)

平陽太原路(宣撫使張德輝、副使謝瑄)

益都濟南路(宣撫使宋子貞、副使王磐)

京兆路(宣撫使廉希憲)

燕京路以下の十路と云へば、之は云ふ迄もなく、其の大部分が國初以來漢人世侯に委ねられて來た地域であり、李德輝以下の人員と云へば、之は又其のすべてが潛邸以來の舊臣である。世祖が宣撫司に對して何を期待してゐたかは、獨り此の點のみを以てするも略と推察し得る所であらう。果せるかな當時の文獻は(牧庵集、姚樞神道碑)此の時東平路宣撫使を拜した姚樞に就て、次の如く其の眞意を明かしてゐる。

上(世祖)即大位。立十道宣撫使。諸侯惟嚴忠濟爲強橫難制。乃以公爲東平。……至治郡。置勸農・檢察二人以監之。

嚴忠濟と云へば、其父嚴實以來、東平路管民總管兼行軍萬戶として、東平を中心とする山東西南部一帯の五十餘城を領有し、一族郎黨を以て占むる萬戶・千戸の軍職數十、爵人命官・生殺與奪の權を一身に掌握する典型的強諸侯の一人であつた。東平宣撫使姚樞が此の嚴忠濟を牽制し監視せんが爲に派遣せられたと云ふ事實は、正しく宣撫司一般の使命をそこに要約してゐであらう。中統三年二月、李璫の叛亂に際して益都濟南路宣撫副使として青州に駐在せる王磐が、いち早く其の報告を中央に致してゐる(元史、王磐傳)のも又其の一例と見ることが出来るであらう。

宣撫使は、其の管下に布列せる漢人世侯の監視を、其の重要な職掌とするものであつた。これに相違はない。併し其と共に、彼等には更に進んで直接民政の一部に關與すると云ふ積極的な任務が在つたのを看過してはなら

ない。中統二年四月二十四日、中書省の奏准した宣撫司所行條畫は職官の陟黜・租税の檢閲等を其の職務に指定してゐる。(中堂事記)此の點、宣撫司の制度は、決して諸侯等によつて歡迎さるべき性質のものではあり得ない。彼等の此の感情は、中統二年世祖が宣撫司制度の強化を策するに當つて、遺憾なく表示せられてゐるのである。新元史、張柔傳に云ふ。

中統二年正月。「張柔」入朝於上都。廷議削諸侯權。選耆德監之。諸萬戶懼。請柔沮其事。柔言於上曰。今治郡者皆年少。未習於政事。若獲罪不加刑即廢法。重繩之則沒其先世之微勞。請使老成人監之爲便。世祖大悅。遂立十道安撫司。諸萬戶皆怒。

朝廷の此の壓迫に對して、實力ある諸侯の中には露骨に反抗の氣勢を示すものも少くなかつた。元史李昶傳によれば

時朝廷裁抑諸侯。法制浸密。〔嚴〕忠濟縱恣自若。

強横の定評ある東平の嚴忠濟は、朝廷の此の意向を無視する態度に出てゐるし、〔柔〕張柔傳によれば

中統二年。「〔柔〕或與〔張〕榮孫宏入朝。因言。益都李瑄反狀已露。宜先其未發制之。未報。明年春瑄果反。益都の李瑄には叛亂の兆候とも見るべき恣意の行爲が執られ初めてゐる。

併し乍ら、此等に對する世祖の態度は強硬であつた。否、嚴密に言つて強硬であり得たのである。蓋し當時の世祖には、少くとも史天澤・張榮・張柔の忠誠が自信を以て豫測せられてゐたからである。眞定萬戶史天澤は、拖雷家の分地が眞定に指定せられた太宗朝以來、之と譜代關係を以て結ばれてゐた。前に十路宣撫司設置に際しても、特に彼が漢人世侯の筆頭の身を以て宣撫使の一員に補せられてゐるのは其の何よりの證左である。史天澤

程の親近さはなくとも、憲宗朝の親臣であつた濟南萬戶張榮及び潛藩以來世祖の麾下に従軍すること多き順天萬戶張柔は何れも其の信賴を得るに足る世侯であり得る。事實前者は李璉の叛亂に際して、後者はかの安撫司設置に際して、等しく全面的に世祖の方針を支持してゐるのである。世祖が彼等の忠誠に確信を有してゐたのは、固より理由ある所でなければならぬ。

世祖の彈壓は先づ嚴忠濟に對して斷乎として下された。中統二年五月十四日、京師に招致せられた東平路管民總管兼行軍萬戶嚴忠濟は一舉にしてあらゆる官爵を剝奪せられて了つたのである。尤も此の處置が一兵をも動かすことなく極めて容易に斷行し得られたかに就ては、嚴氏一族内に蟠つてゐた内訌が與て大いに力があつたことは確である。中堂事記によれば、嚴忠濟の罪を密に發いて之に代つた者は他ならぬ彼の弟忠範であつた。此の點、嚴忠濟に對して斷乎たる處置に出でんとした世祖には、其が大叛亂に迄發展する危険のない事件としての豫想があつたであらう。併し縱令さうであつたとしても、其は決して世祖の強硬態度を否定する事實とはなり得ない。處罰と同時に、世祖は諸路官僚に勅を下して「無是效焉、國有常刑。犯不容宥」と嚴に彼等の恣横を戒めてゐるし、又嚴忠範に與へた十七日の親諭には

兄弟天倫。事至於此。朕甚憫焉。今予命爾尹茲東土。非以訟受之也。彼所責匪輕。敬哉。今而後苟不克荷。非若汝兄幸而免也。

と云つて、其の毅然たる態度を明かにしてゐるのである。

かく觀じ來る時、中統三年二月、山東に勃發した李璉の叛亂は、確に世祖政權と漢人世侯との間に昂まりつゝあつた此等嫌隙の最高調を意味するものと云はねばならないであらう。事實、姚樞神道碑が傳へてゐる如く

「李瓊謀叛」帝問卿料何如。對曰。使瓊乘吾北征之釁留後兵竄。瀕海搗燕。閉關居庸。惶駭人心爲上策。與宋連和。負固持久。令數擾邊。使吾罷於奔救爲中策。如出兵濟南。待山東諸侯應援。此成擒耳。

李瓊には山東諸侯の應援が期待され得たのである。而も其は、單に一方的に漠然と希望されてゐたのではなくして、已に事前の工作を経た期待であつた。德州の世侯たる萬戶兼軍民總管劉復亨の許には彼の密使が届けられてゐたし、(元史、劉通傳) 太原の世侯たる總管李穀奴哥・達魯花赤戴曲薛に在つては、之に呼應して已に其の檄文を旁郡に傳へてゐた。(元史、本紀) 濟南萬戶張榮の次子たる萬戶張邦直兄弟及び姜郁・李在等二十七人が何れも至元元年を以て處刑されたのも、實は李瓊の逆黨としての罪が露見に及んだ結果に他ならなかつた。(同上)そして最後に、現に彼と行動を共にして起つた者に徐州の總管李杲哥があつた。(元史、嚴忠嗣傳)からである。

李瓊の叛亂がかくの如く、單なる漢人世侯の個人的な不滿の爆發ではなくして、實に世祖政權に對する不平分子の集團的反抗であつたことは、叛亂自身の意義並に其の影響を深刻たらしめずにはおかぬ。果然、元朝は叛亂の終熄を俟つて、急速且徹底的な壓力を漢人世侯一般の上に加へるのである。

中統三年十二月、諸路轉運司の設置と共に財賦の權限が先づ盡く中央に回收せられた。次で同月、各路總管にして萬戶を兼ねる者は惟民事を理めて軍政に與る勿れと云ふ詔によつて、世侯の軍民官兼領の特權は決定的に撤廢せられた。而も其は獨り個人的に於て然るのみではなかつた。元史、王珍傳によれば

中統三年制。父兄弟子並仕同塗者罷其子弟。

とあつて、一族同門内に於ける官職の限界が其に附隨して在つたのである。軍政・民政に互る支配權を自ら世襲的に掌握すると共に、他面數多き一族子弟を軍民兼領官として統率し來つた嘗ての世侯にとつて

蓋列聖之制。職兵民者死。其子孫皆世之。變自世祖。……其有相而兼將萬夫者。詔俾自擇爲之欲將棄相欲相棄將。

の如く（牧庵集、張興祖神道碑）單なる管民官を擇ぶか然らずんば單なる管軍官を以て甘んずるか、其の何れか一方しか許容せられなくなつただけでも、彼等の蒙る打撃は痛切であつた。其が今や一族同塗の禁止に際會したのである。此の結果、眞定の史氏は中書右丞相史天澤・萬戶史權を除き一門同時に兵柄を去る者十七人を算へ、順天の張氏は萬戶張弘略一人を残して其の兩弟弘彥・弘範の萬戶職を返上した。東平の嚴氏は萬戶嚴忠範を留めて其の兄萬戶忠嗣を廢せられたし、濟南の張氏・大名の王氏は夫々軍官としては萬戶張榮・千戶王文振を残して其の孫宏、其の兄文幹は之を民官に轉補せしめてゐる。漢人世侯の權勢は、是に至つて殆ど壊滅したとも云ひ得るであらう。其の彼等の上に、やがて軍政に關しては中統四年正月の十路奥魯總管府の設立が、民官に對しては至元元年十二月の遷轉法の施行が發令されて來ると、元朝の中央集權は遂に最後の完了の域に到達する。蓋し奥魯即ち軍戸に對する支配權を失つた管軍官はこゝに單なる軍隊の指揮者と化し、世襲權を奪はれた管民官はこゝに一介の官吏に墮して了つたからである。

往日諸侯世官。擅生殺禍福聚斂封植之權。故一方愚民不知有朝廷之尊。而知有諸侯也。今之總管府有如是之權歟。與常賦之外不敢擅一錢。流罪以上之刑一一申部。五十月而遷陟。何重權之有。

至元の初、諸路總管府の權限を論じた胡祇遼の此の言葉ほど右の真相を明瞭に述べたものはなからう。其所に見出されるものは、單なる州縣官でこそあれ決して漢人世侯の存在ではない。此の點、元史本紀が此の最後の日附を以て「始罷諸侯世守」と爲してゐるのは頗る意味深きものと云はねばならない。其は正しく封建勢力の漢地よ

りの完全な拂拭を現はしてゐると共に、他面翌至元二年を以て本格的に開始される元朝州縣制度の出發點をも意味してゐるからである。

む す び

蒙古大汗國は漢人世侯を建てることによつて、其の支那經略を著しく進展せしむることが出来たと共に、他面其の維持に就て多大の便宜を獲得した。其は、私兵を貯へ領民を率ゐた此等漢人世侯が其の領域に對して直接自己の責任と利益とを感ずる結果に他ならなかつた。かくして彼等の略取した土地が、其の直接統治によつて必然致されるであらう所の荒廢から救はれたことは、何と言つても蒙古朝にとつては幸であつたと云はざるを得ない。

併し乍ら此のことは、同時に其れだけ漢人世侯に其の私勢力の保有を許したことを意味してゐる。蒙古朝廷は以後、其の直接統制力を漢地に及ぼさんと企てる毎に、意外に強固な障害としての彼等を見出さねばならなかつた。此の點、從來の植民地的支配から完全に離脱した世祖政權が漢地に出現するに至つて、其が根本的解決は不可避となつて來るのである。帝國の邊地に強力を誇り而も世祖政權に對して疏縁な關係に立つ諸侯は、是に至つて最も危険な存在となるであらう。そして此等の條件を具備せる者として東平の嚴忠濟があり益都の李壇が居つたのである。

李壇の叛亂は結局失敗に終り、漢人世侯は僅か一年有餘の後には一齊に其の姿を没し去つた。併し乍らかくして潰滅した漢人世侯は、やがて元朝の州縣制度の中に新なる形の下に復活するであらう。根脚、即ち朝廷との譜代關係を唯一の基礎として結成せられた官僚貴族としての再起が即ち是であつた。元朝の所謂新貴族制度なるものは、實にこの上に展開さるべき事態であつたのである。